

第6節 ベンショ塚古墳出土砥石の評価

ここでは、既往の理解をもとにベンショ塚古墳出土砥石の位置づけを行い、法量や使用痕跡等をもとにした分析から評価を行う。

第1項 古墳出土砥石の研究とその評価

砥石は、金属製品等の整形・研磨に利用する道具である。据え置きで用いる置砥と、紐通しの穴があけられた提砥があり、より特徴的な提砥の研究が比較的進められている（門田 2001、角南ほか 2002）。古墳出土事例については、川田壽文による集成があり（川田 2008）、形態や副葬状態・共伴遺物などから朝鮮半島との交流を背景に副葬された遺物であることが良く述べられている（入江 1998、門田 2001、鹿野 2006）。また、細川晋太郎は提砥と置砥の違いに着目し、砥石の出土位置から提砥は武器に、置砥は工具類に関連する可能性を示し、倭王権の関与による砥石副葬の存在を指摘した（細川 2015）。

このように、砥石研究は集成をもとにした一定の基礎研究が行われているものの、提砥や副葬位置に着目した研究、あるいは朝鮮半島との関連を追求する研究が主体的であるといえる。

第2項 既往の研究からみた評価

以上の研究をふまえてベンショ塚古墳出土砥石をみると、第2埋葬施設の甲冑のそばで置砥1点が出土している。ベンショ塚古墳では、短甲の内部に冑と工具を収めており、鉄鎗は短甲のそばに束でまとまっていた。工具と武器・武具が近接して出土しているため、細川が指摘するように置砥が工具に関連するといえる条件ではないが、全国的な傾向と同様に工具が共伴し、またそれに近い位置で出土していることは、既往の理解を追認する成果であるといえる。このことから、ベンショ塚古墳の砥石も意図的な位置に副葬された事例であると評価できる。

また、ベンショ塚古墳で出土した馬具は国内に類例のない形態であり、伽耶の玉田古墳群出土品に類例が認められる。出土馬具が舶載品であるかは不明確であるものの、ベンショ塚古墳が半島由来の副葬品をもつ点は、砥石の副葬を朝鮮半島との交流を背景としてきた既往の研究を裏付ける事例であるといえる。

第3項 法量からみたベンショ塚古墳出土砥石

既往の研究では、砥石自体の特徴から傾向を抽出するような研究はあまり提示されていない。古墳時代の副葬

品のなかには、銅鏡や短甲など、型を用いて製作するのが一定数認められる。しかし、砥石には様々な材質・形状・法量があり、その生産が他の副葬品のような規格性をもつものではなさそうである。このことは、砥石が規格品として生産されたものではなく、比較的誰でも必要性に応じて製作・利用することができるものであることを示す。

他方、砥石には様々な形があるなかで、側面の中位がくびれる形を呈する鼓形のものが代表的な形として存在する。これは、側面を研面として使用したことで磨り減った結果と評価されているが、後述するように研磨に適切なこの形をもともと意図したものと考えられる。砥石自体が規格的な生産品でないにも関わらず、このような傾向がみられるのは、おそらく鉄器生産組織のなかで、そのように形作ることが機能的な理にかなっていたのであろうと想定できる。結果的に、農工具や武器とともにセットで副葬されていることはこれを補足する。

ここで、改めてベンショ塚古墳出土砥石をみると、形状は鼓形ではなく、板状長方形を呈する。また、一般的な砥石と比べてかなり大きなものであることが特徴であるといえる。したがって、法量に焦点をあててみた場合に、ベンショ塚古墳出土砥石がどのように評価できるかを分析したい。

川田集成によると、砥石の種類に関わらず長さでみた場合、40cm以上が1点、30cm以上が12点、20cm以上が28点、10cm以上が107点、10cm以下が139点であった。つまり、一般的な古墳出土砥石は10cm前後であるといえ、20cmを超えるものは大型品であることがわかる。ベンショ塚古墳出土資料は30cmであることから、古墳出土砥石のなかでは最大級であると評価できる。そこで、法量を基準として他の属性との相関性についてを検証したい。

まず、法量と出土古墳の時期についてであるが、20cm以上の大型品で見た場合、3世紀代が1点、4世紀代が5点、5世紀代が17点、6世紀代が15点、7世紀代が2点であった。古墳に副葬する砥石自体が5世紀以降に急増していくことをふまえると、とりわけ時期による法量の変化はなさそうである。

次に、法量と墳形の関係をみると、20cm以上の大型品は前方後円墳が8点、円墳等が33点である。10～20cmでは前方後円墳11点、円墳等が96点であり、10cm以下では前方後円墳16点、円墳等が123点である。前方後円墳が占める割合でみれば、20cm以上は19%、10～20cmは10%、10cm以下は11%となり、大型品は

前方後円墳での出土比率が高い傾向にあることがわかる。ただし、10cm前後の小型品であっても前方後円墳からの出土がみられるし、大型品であっても円墳等から出土することがあるため、一概に法量による階層関係があるともいえない。このことは、砥石の生産・流通がその他の副葬品とは異なることと関連する可能性があろう。

最後に、地域性に着目してみると20cm以上の大型品31点のうち、東日本出土資料は4例のみで西日本に偏る傾向がある。先の検討とあわせれば、傾向としては西日本の前方後円墳に大型品が副葬される場合が多いと評価できよう。ベンショ塚古墳はこの条件を満たしていることから、砥石副葬古墳の代表的な傾向を示すものといえる。

(村瀬)

第4項 使用痕跡からみたベンショ塚古墳出土砥石

次に、実用砥石のなかでの位置づけを試みたい。川田集成のうち、砥ぎ減りや使用痕跡の残る砥石について限定してみた場合、鼓形を呈する個体が22点と最も多く、次いで四角柱10点、短冊形10点となり、砥石全体の傾向と同様である。いずれの形状も5～6世紀代が多くなる点、円墳出土の個体が卓越する点など、時期差・階層差・地域性をみても実用砥石であるからこそその傾向はみられない。つまり、砥石を使用して鼓形になるのではなく、その形が砥石の基本形態として製作時に意識されていたことを示す。

対して板状を呈するものは、ベンショ塚古墳出土砥石を除いていずれも小型品であるが4例のみであり、やや特異な形状であるといえる。鼓形のものが多くなるのは、先述の通り砥ぎ減りや機能性によるものと考えられるが、板状のものとの差異には材質による用途の違いも要因としてあげられる。

鼓形の砥石の材質についてみると、凝灰岩11点、なかでも流紋質凝灰岩が7点と多くを占め、次いで砂岩3点と比較的軟質で粒度の荒い石材が用いられる傾向にある。粒度の荒い砥石は荒砥ないし中砥に分類でき、一般的に刃欠けや刃先の修正に用いる。荒砥や中砥は鉄器を砥ぐ面積の広さや使用頻度から砥ぎ減りが大きく、鼓形の形状の方が効率よく鉄器全体を研磨できたのであろう。

一方で、板状および凹みの小さい四角柱の砥石は粘板岩など粒度が細かい泥岩質のものが主体であり、刃先の細かい傷を取り去る仕上げ砥として用いられたものと考えられる。ベンショ塚古墳出土砥石も硬質で粒度が細かく、仕上げ砥に分類できるものである。ただし、条線状の使用痕のほかに金属製品を削ったような深い研磨痕が残っていることから、仕上げだけでなく荒砥のように刃先の修理にも使用した可能性も付しておきたい。

(山口)

第5項 まとめ

以上の通り、ベンショ塚古墳出土砥石について既往の理解の中での位置づけ、法量・使用痕跡等に着目した上の評価を行なった。

その結果、ベンショ塚古墳で砥石が出土することは、他の属性をふまえてみても理にかなった条件での事例であることがわかった。裏を返せば、馬具などとともに朝鮮半島との交流を物語る上で重要な資料であるともいえる。ただし、基本的な副葬品組成は列島の首長墳と同様で半島の影響がとくに強いというわけでもない。この点は、ベンショ塚古墳の被葬者像を考える上で重要であろう。

(山口・村瀬)

参考文献

- 入江文敏 1998「佩砥考—日韓出土資料の検討—」『網干善教先生古稀記念考古学論集』網干善教先生古稀記念論文集刊行会
- 鎌木義昌 1965『隨庵古墳』総社市教育委員会
- 角南聰一郎・田部剛士 2002「古墳出土砥石の基礎的研究—近畿地方の事例—」『奈良大学大学院研究年報』7 奈良大学大学院
- 門田誠一 2001「古墳出土の提砥—近年の韓国出土資料との対照による若干の視点—」『園部岸ヶ前古墳群発掘調査報告書』仏教大学校地調査委員会
- 鹿野豊 2006「古墳出土の砥石」『財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府弥生文化博物館・大阪府近つ飛鳥博物館 2004年度共同研究成果報告書』
- 川田壽文 2008「砥礪考2-古墳出土砥石集成-」『白門考古論叢II』中央考古会
- 末永雅雄編 1991『盾塚 鞍塚 珠金塚古墳』由良大和古代文化研究協会
- 清喜裕二 2015「岡山市新庄下所在古墳(千足・榎山)出土の砥石とその評価」『千足古墳-第1次～第4次発掘調査報告書-』岡山市教育委員会
- 細川晋太郎 2015「五條猫塚古墳出土砥石の副葬背景」『五條猫塚古墳の研究』総括編 奈良国立博物館